防衛大学校本科第３３期及び理工学研究科第２６期学生卒業式における学校長の式辞（平成元年３月１９日）

第5代学校長　夏目　晴雄

防衛大学校本科第３３期及び理工学研究科第２６期の学生諸君は、本日をもって所定の全課程を終了し、４年ないし２年の小原台生活に別れを告げることになりました。ここに卒業生諸君全員に対し、心からお祝いを申し上げます。

本日、この栄えある式典に、国務御多端の折にもかかわらず御臨席を賜りました竹下内閣総理大臣[注(1)]、田澤防衛庁長官[注(2)]、高辻法務大臣[注(3)]、小泉厚生大臣[注(4)]をはじめ、国会議員の諸先生ほか内外多数の来賓各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

また、卒業に至るまでの間、防衛庁自衛隊の関係者各位、官民の諸機関並びに在日米軍、各国大使館等からいただきました御指導、御協力に対しましても、併せて厚く御礼申し上げる次第であります。また本校において、教育訓練に、生活指導に、各般の校務に日夜を分かたず尽力してこられた教職員各位の熱意に対しましても、学校長として深甚なる感謝と敬意を表するものであります。

更にはまた、遠路をも顧みず御参列賜りました御父兄の皆様方に対しましても、今日までの御援助に深く感謝申し上げますとともに、御子弟の成業を心からお祝いするものであります。

４５３名の本科卒業生諸君、顧みれば、昭和６０年の春４月、希望と不安との交錯する中、緊張感に胸を震わせながら、ここ小原台の門をくぐられたことと思います。将来幹部自衛官として、その生涯を防衛の職務に捧げようという決意も必ずしも強いものではなかったかも知れませ

注(1)　竹下　登

注(2)　田澤吉郎

注(3)　高辻正巳

注(4)　小泉純一郎

ん。

それから４年間、ここ小原台での生活は、諸君にとつてはかけがえのない１回限りの青春であり、若さと情熱を燃焼させた時代でありました。厳しい団体生活の中で、勉学や訓練に励み、幾多の苦しいハードルを越え、試練に耐え、一回りも二回りも大きく逞しく成長いたしました。そして、幹部自衛官となるべき決意も揺るぎないものとなりました。今や胸を張って堂々と卒業して行く資格は、諸君のものであります。

タイ王国４名、シンガポール共和国２名の留学生諸君に対しても、心から祝福を贈るものであります。

さて諸君は、これから陸・海・空それぞれの幹部候補生学校において、初級幹部としての専門教育を受けるわけでありますが、諸君の幹部自衛官としての修業は、全てこれからが本番であります。

国家防衛の任はあくまで重く、その道は遥かに遠いのであります。プロフェッショナルとしての自衛官の道は、決して平坦なものではありません。また防衛の職務は、名声や喝采とはおよそ無縁のものと覚悟しなければなりません。防衛問題や自衛隊に対する世間の理解や認識は必ずしも十分とは言えない現実も無視できません。しかし、逆風に立ち向かい、困難に敢然と挑戦してこそ道は開かれ、苦しみに耐えてこそ、人間に幅と深さが加わるものであります。

前途は遠い。しこうして暗い。しかし、恐れてはならぬ。恐れない者の前に道は開かれる。行け。勇んで。小さき者よ。

これは、作家有島武郎が、自立して厳しい人生の戦いに立ち向かおうとする子供に贈った励ましの言葉であります。そこには、たとえ挫折しようと、泥にまみれようと、その苦しみを確かな人生を生き抜く契機に変えてゆく子供の英知と勇気に、全てを託す以外にないという親の思いが込められております。

諸君は、小原台での４年間、幾多の貴重な体験と実践を積み重ねてまいりました。伸展性のある資質にも十分磨きをかけてきた筈であります。自信を持ち、まっすぐ前を見据えて、幹部自衛官としての道を邁進して貰いたいと思います。

また私は、かねがね「優れた士官」であるためには、まず、「真の紳士」でなければならないと説いてまいりました。このことは、自衛官としての透徹した使命観を自覚し、防衛の専門家としての知識技能を修得すべきはもとより、社会人としての健全な常識と幅広い教養、そして豊かな人間性をも併せ持つことを意味します。

防衛大学校の教育は、視野の狭い、特殊な戦争技術者の養成を意図したものではなく、国家社会の一員として、その職責を尽し得る資質と識見の涵養を目的としていることは論をまちません。

特に、諸君が巣立ち行く社会は、情報と知識が爆発的に増加し、価値観も限りなく多様化することが予想されます。そこでは、いかなる職業を選ぶにせよ、広い角度と高い視点に立った複眼的思考力と、正しい価値観を身につけることが不可欠となります。諸君に対し、自衛官としてのたゆみない研鑽に加え、偏することなき「人間としての修業」を怠らぬよう望む所以であります。

これからの時代は、また不確実の時代、不透明の時代と言われるように、保有する知識の量だけでは、必ずしも将来の指針となり得ない時代であります。諸君が本校で学んだことや経験したことだけでは解決できないこと、将来が見えないことが、次々と押し寄せてくるでありましょう。そういう時代の人間にとって最も大事なことは、いたずらに持っている知識の量を誇ることではなく、それらをいかに創造的に活用するかということであります。

広さ数頃（すうけい）にして源なき塘水とならんよりは、深さ数尺なるも、源ある井水たらん

という言葉があります。諸君は、平成という新しい時代を切り開いて行かねばなりません。どうか、大きな堤（つつみ）となることよりも、たとえ小さくともあふれんばかりの泉となるために、精進されんことを要望します。

そのためには、常に問題意識を失わず、自ら考え、自ら判断し、そして、己が信ずるところを敢然と行動することが必要であります。人生の偉大な目的は、知識ではなく、行動であることを銘記して下さい。

次に、理工学研究科６５名の卒業生諸君に対し、一言申し述べます。

最近の科学技術の著しい進歩に伴う装備の高性能化、複雑化などの質的変化は、軍事戦略及び戦術に大きな変革をもたらしております。諸君は、理工学に関する大学院レベルの専門的知識・技能を修得すべく、２年の歳月を本校で過ごされ、頭脳の充電を図り、将来への飛躍と大成のポテンシャルを培う貴重な研究体験を積まれたのであります。

今後、諸君は、それぞれ新たな任務に就かれるわけでありますが、更に、研鑽に努められ、ますます重要となりつつある自衛隊の科学技術分野の発展向上に尽力されるよう切望してやみません。

小原台生活の幕は、いま正に閉じようとしております。これから先、同期生同士、その融和と団結を更に強め、いかなる部署、いかなる境涯

にあっても防大出身者としての誇りを持って、お互いに手を取り合い、助け合いつつ、祖国日本の輝かしい将来のために挺身して行かれんことを、お別れに当たり心から祈念しつつ、ここに式辞を終わるものであります。